

【農業農村工学の「つなぐ・つながる」を考える】を読んで

近年、インターネットは生活に一層不可欠なものとなっている。大学においても例外ではなく、私自身も大学入学の時点でノートパソコンは必携と指定されていた。もはや日常と切っても切れない存在であるのは明らかである。

一方、農業へのICT活用について、日常で一般市民が意識する機会は少ない。農村とインターネットは一見結びつきにくく、想像がしにくい現状があるためだと考えられる。しかし、これではもったいない。いわゆるスマート農業においては、農作業の省力化や生産効率の上昇に資するという利点があるが、私はこれに加え、「つながる」という部分に注目した。

代表的なものでいえばSNSである。今や企業や行政はもちろん、個人が情報発信し、つながることのハードルはかなり低くなった。これらの強みを生かし、農家間の交流や情報共有に役立てることができるだろう。既存のSNSでも上記の目的で用いられ、他者からの発見・評価につながった例もみられる。以上のように、ハード面に用いられるだけでなく、ソフト面での弱点も補っていく必要があると考える。

【下野新聞 日曜論壇 「コロナで変わる大学教育」を読んで】

上の文章の繰り返しになるが、私の大学では入学時にノートパソコンを必ず持つようにとの指定があった。早めに購入しておいた記憶がある。実際、レポートやスライド作成をするうえで欠かせないのでとても役に立っている。さらにパソコンに限らず、学生がアクセスして講義や講義資料の情報を得るウェブシステムもある。最近では学内掲示もオンラインに集約されるようになり、このうえなく便利になったと感じている。

これらの仕組みは今や当たり前のものとなりつつある。同時に、仕組みができる前の学生生活はなかなか大変だったのだろうと想像した。経験したことは無いのだが、履修申告は紙が基本であっただろうし休講や学生の呼び出しも掲示板まで足を運ばねばならなかったはずである。時間を省いて情報を確認でき、さらに外出先から最新情報も得られるので、「せっかく大学まで行ったのにまさかの休講だった」というような無駄足を踏まずに済むわけである。

私たちやこれからの学生の多くにとっては、このシステムを利用することはそこまで難しい話ではないだろう。同時に、この流れを非常時への対処法についても検討する機会とすべきではないかと考えた。

大学の話からは外れてしまうのだが、私の母はガラケーを含めた携帯電話類を持っていない。最近が高齢のお年寄りで使いこなしている人もたくさんいるので、その気になれば操作自体はマスターできるだろう。本当に必要になったときには持つとしても、生活していくうえでシステムから取り残されないようにしていく必要がある。

たとえば、飲食店で注文する際に QR コードから自身のスマホで読み込んで注文、というシステムを採用している店舗がある。非常に便利で私も使っているが、もしここでスマホを忘れてきたり、うっかり充電を切らしてしまっていたりしたらどうだろう。店舗側に注文用の端末があれば何とかなるが、店員の負担を考えると非常にまずいということになる。

所持が指定されている大学は別としても、日常生活に拡大してみれば私の母のみを例外として扱うことはできないし、私たちもそういった場面に遭遇する可能性は必ずある。以上の点から、必要に応じて柔軟な対応ができるよう、同時並行で想定していくことが求められると考える。